

入館案内

●開館時間 9:30～17:30 (入館は17:00まで)

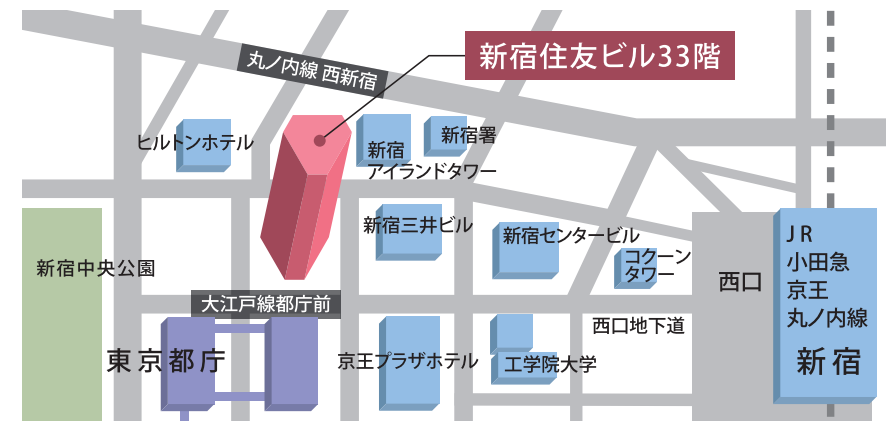
●休館日 月曜日

※祝日または振替休日の場合はその翌日

※夏休み期間は除く

年末年始(12月28日～1月4日)、新宿住友ビル全館休館日

●所在地 〒163-0233 東京都新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル33階



●お問い合わせ

Tel.03-5323-8709 Fax.03-5323-8714

<https://www.heiwakinen.go.jp>

平和祈念展示資料館(総務省委託)

●都営大江戸線

「都庁前」駅より徒歩 約3分

●東京メトロ丸ノ内線

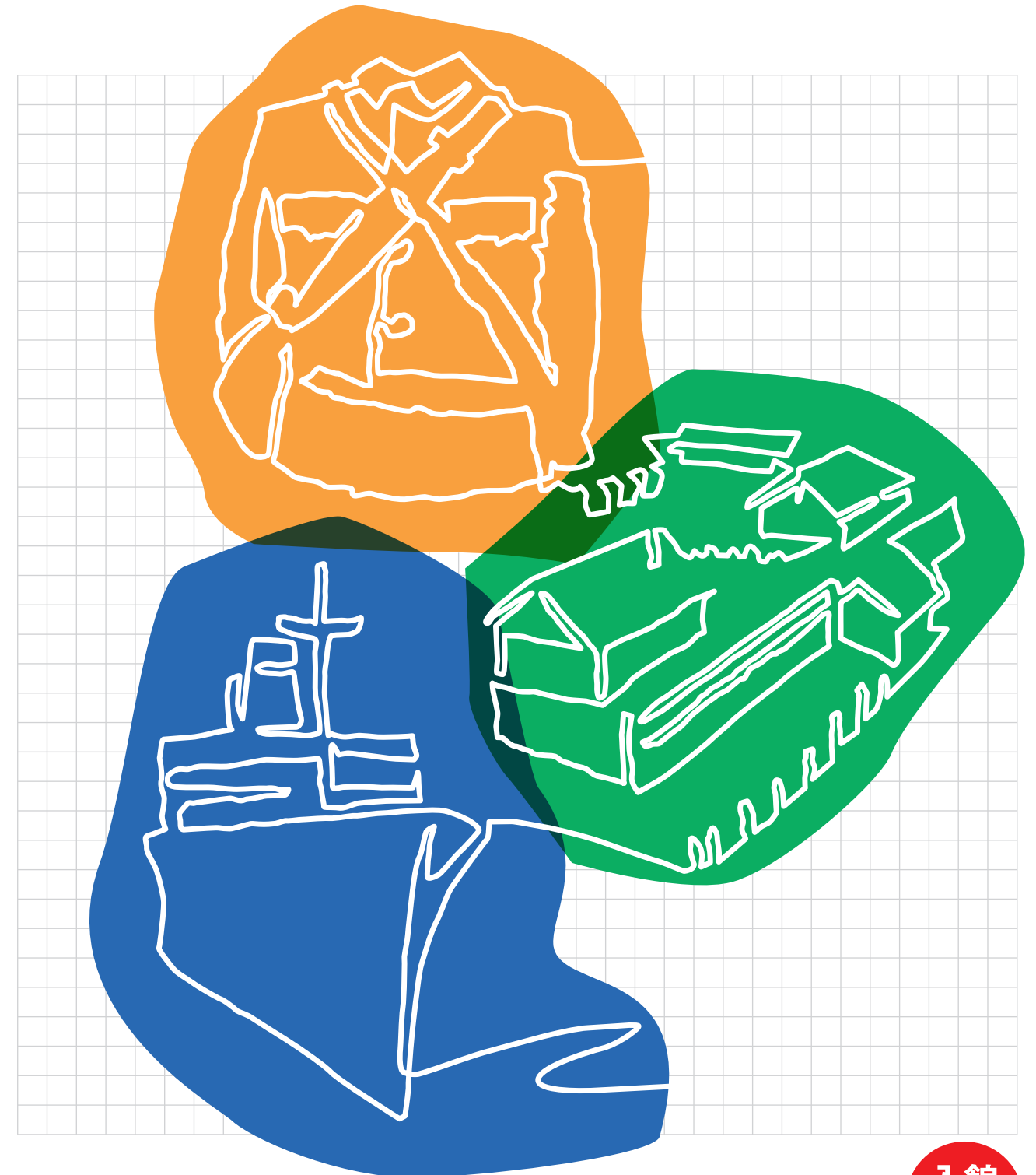
「西新宿」駅より徒歩 約7分

●JR線、小田急線、京王線

「新宿」駅西口より徒歩 約10分

見学ノート

へい わ き ねん てん じ し りょう かん
ようこそ! 平和祈念展示資料館へ



入館
無料

スタンプ

平和祈念展示資料館は、第二次世界大戦が終わってからも、言葉では言いあらわせないほどの苦しくつらい体験をし、生き抜いた「兵士」「戦後強制抑留者」「海外からの引揚者」の人たちについて、知ることができる場所です。

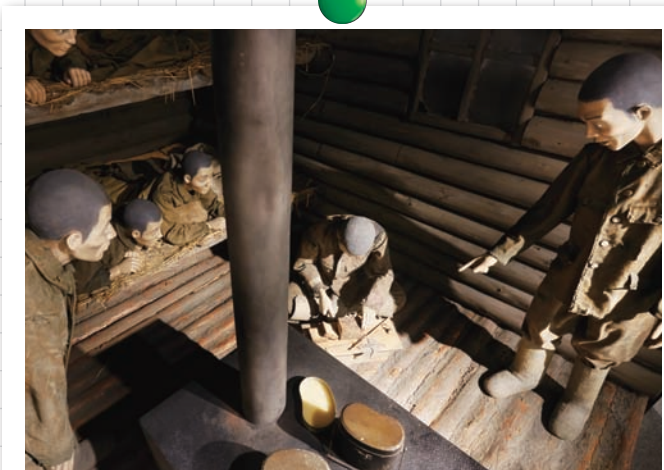
兵 士

第二次世界大戦で、国のために家族を残し、危険な戦地に向かい、命をかけて戦い、苦しくつらい体験をされた人たちはです。



戦後強制抑留者

戦争が終わったにもかかわらず、旧ソ連やモンゴルの寒さが厳しい地域において、わずかな食べ物でつらい仕事をさせられた人たちはです。

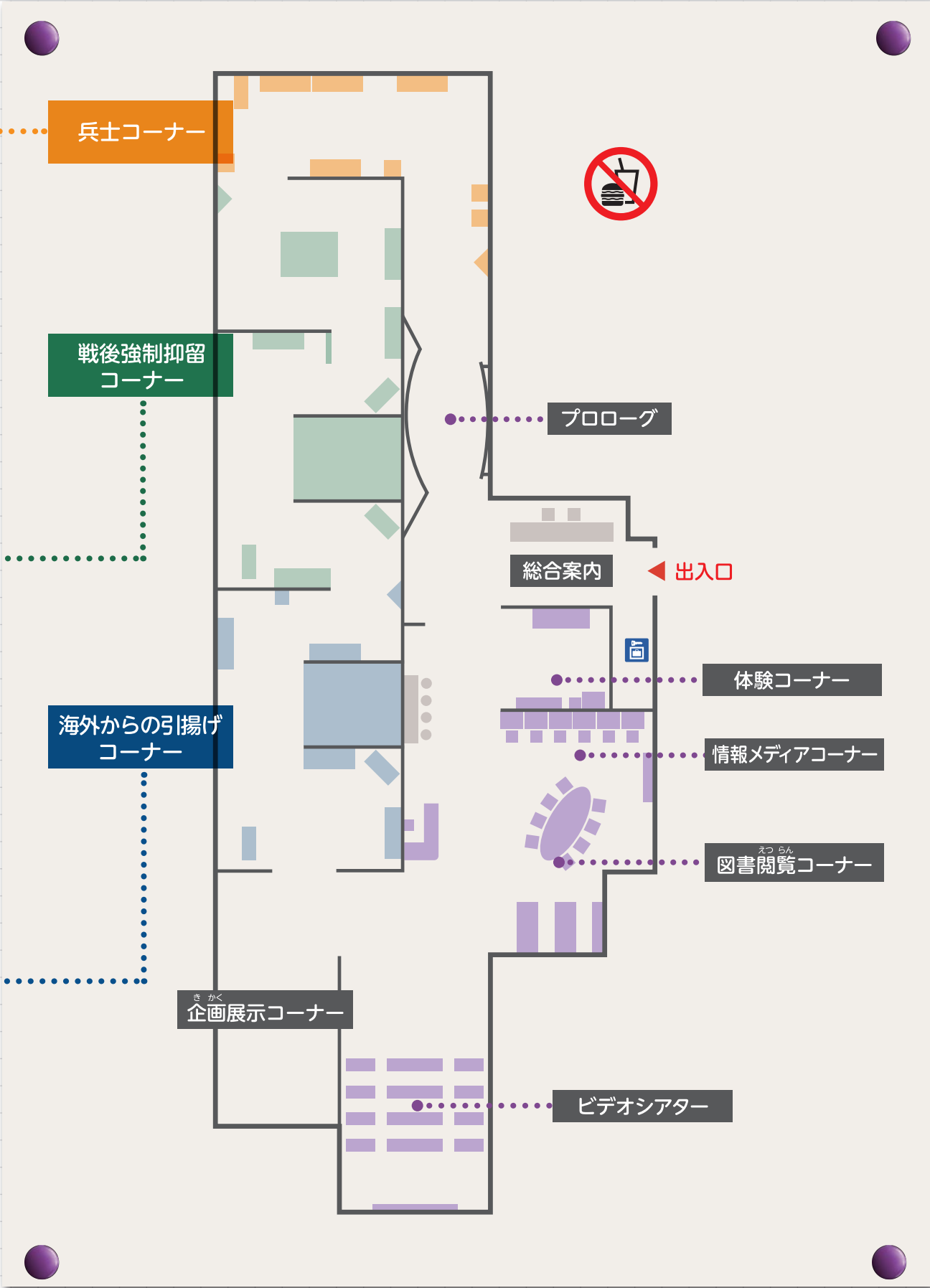


海外からの引揚者

敗戦によって生活のすべてをなくし、命さえ危ない状況で、必死の思いで日本に戻ってこられた人たちはです。



館内案内図



その他のコーナー



企画展示コーナー

さまざまなテーマで企画展を開催しています。



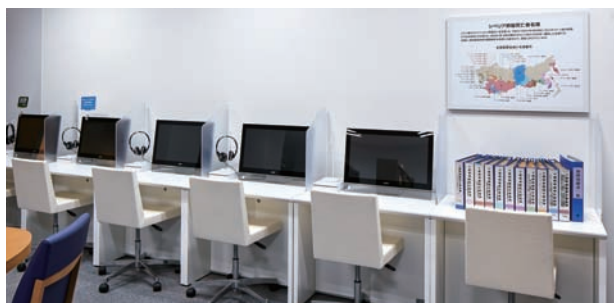
ビデオシアター

週替わりで約30～40分のビデオを上映しています。



図書閲覧コーナー

約2千冊の図書を、自由に読むことができます。体験者の手記をまとめた『平和の礎』や、子ども向けの本など、展示資料に関連した本があります。



情報メディアコーナー

体験者の貴重な証言を聞いたり、映像を見たりできます。チャレンジクイズにも挑戦してみてください。



体験コーナー ～みて、きいて、さわって～

見学した展示を振り返りながら、みる、きく、さわるなどの体験ができます。

プログラムや取組



語り部お話し会

体験者の貴重なお話を聞くことができる「語り部お話し会」を毎月第3日曜日に開催しています。



展示解説

解説員が分かりやすい展示解説を行っています。



音声ガイド

代表的な資料の解説を聞くことができる音声ガイド機器を無料で貸し出しています。



館内イベント

語り部お話し会、読み語り、ワークショップ、アニメの上映などさまざまなプログラムを用意しています。



地方巡回展

当資料館の代表的な資料や写真などを使った展示会を全国で開催しています。

さあ、見学をはじめましょう



体験者の「ことば」をさがしながら展示を見ていきましょう

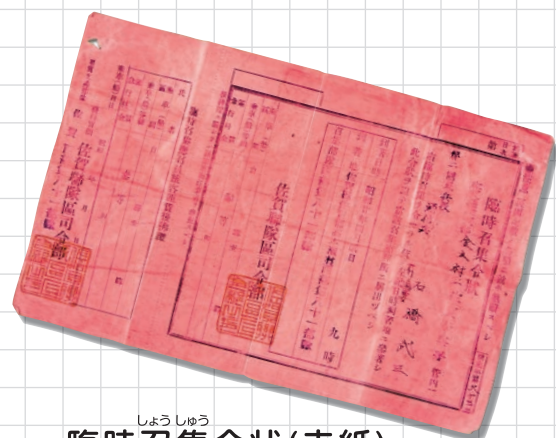
展示の中には、
苦しくつらい体験をされた人たちの、
さまざまな「ことば」があります。
印象に残った「ことば」を、書いてみましょう。

体験者のことばと写真で囲まれたイメージ空間を抜けると、
「兵士」「戦後強制抑留」「海外からの引揚げ」の3つの労苦と、
関係する主な出来事を紹介しています。



徴兵制と兵士

兵士には、自ら軍人となった人のほかに、国民の義務として集められた人がいました。日本の男性は、満20歳になると、徴兵検査(兵士に適しているかどうかを判定する身体検査)を受けて兵士にならなくてはならない決まりがありました。



臨時召集令状(赤紙)

戦争で多くの兵士が必要になった際に、徴兵検査で合格した男性を集めるための命令書です。その色から「赤紙」と呼ばれました。

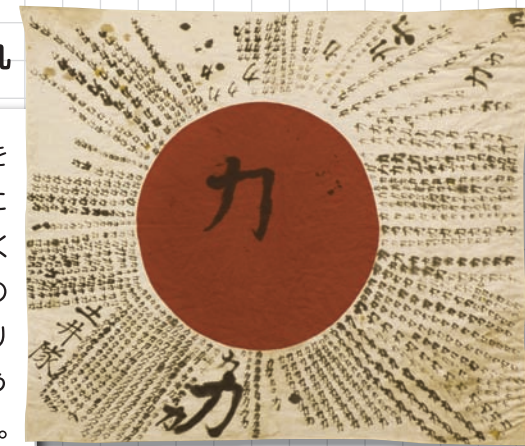
赤紙の正式な名前は何でしょう？

兵士と家族の思い

出征(兵士として戦場に行くこと)のときは、家族や近所の人から、戦いで勝つことを祈り、また敵の弾に当たらないで無事に過ごせるように願いをこめた品が贈られました。

「千人力」の日の丸

日の丸に「力」という字を書いて、戦場に行く兵士に贈ったお守りです。たくさんの男性が自分たちの力を貸すので、しっかり戦ってくるように、という願いがこめられています。



千人針

千人の女性たちが、赤い糸で玉留を縫ったものです。「玉留」は「たまをとめる」と書きます。つまり、鉄砲の弾を止めるという「げん」を担いだものです。



弾除け祈願のチョッキ

弾除けと武運長久の願いをこめ、女性が前線(戦場で敵と直接向かい合っているところ)の兵士に贈ったお守りのチョッキです。「武運長久」とは、兵士の戦場での強い運がいつまでも続くことです。

兵士を送り出す家族や友人はどんな気持ちだったのでしょうか？



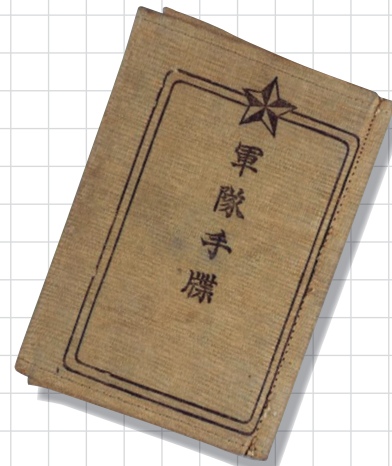
考えてみよう

厳しい軍隊生活

軍隊に入って1年目の兵士は、まず体力をつけ、軍人としての知識やふるまいなどを身につけなければなりません。そのため、厳しい訓練や教育を受けました。やがて戦争が終わりに近づくと、十分な訓練や教育が行われないままに、戦場に送り出されるようになりました。

陸軍通信隊の電鍵

通信兵がモールス信号を打つための機器です。昭和16(1941)年製造。この電鍵は、陸軍の通信隊に配属となった初年兵の訓練で使用されました。



軍隊手牒

陸軍の兵士の身分証明書と履歴書を兼ねた手帳です。氏名、生年月日、本籍のほか、所属部隊、兵科、階級、服のサイズ、入営からの軍歴などが書きこまれました。

戦陣鏡

兵士が弾除けのお守りとして、左の胸ポケットに入れて肌身離さず持ち歩いていたものです。



メンタ酒入れ

メントール*とアルコールを主原料として作られた薬品です。戦地では、消毒や気絶した兵士の意識を回復させるための薬として用いられました。
※ハッカ油に*含まれる成分。

「関連する主な出来事」をチェックしてみよう

👉 P19~20

昭和6(1931)年 満州事変

昭和12年 日中戦争が始まる

第二次世界大戦が始まる

昭和16年 太平洋戦争に突入

日本側は、1千万人以上の人たちを戦場に送りこむ

戦争が長引くにつれ戦局は不利になる

戦場では兵器や食べ物などが不足する

玉砕や特攻、自決、飢え、伝染病などにより、数多くの兵士が命を落とす

昭和20年8月15日 終戦

戦場の拡大と戦局の悪化

戦争が長引くにつれて物がなくなるなど、次第に不利な立場となっていきました。戦局の悪化により、数多くの兵士が命を落としました。

陸軍の兵士が着た軍服

左側は昭和14年に、右側は19年に作られたもの。物が足りなくなり、素材や作り方がだんだんと悪くなっていきました。

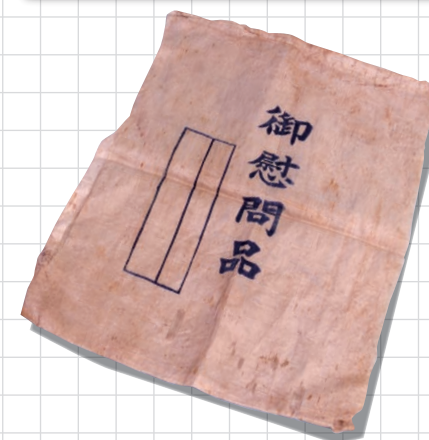


兵士は、どのような物を身につけていたのでしょうか？



慰問袋

戦地の兵士を励ますために、国民が日用品や雑誌、手紙、お守り、菓子などを詰めて送った袋です。



「慰問袋を受け取って」

小柳 次一 さん撮影

戦地にも慰問袋が届きました。日本国内の様子を伝える雑誌や新聞は兵士に喜ばれました。

小柳さんは、陸軍専属のカメラマンとして、兵士の写真を撮り続けました。





終戦と抑留の始まり

昭和20(1945)年8月9日、ソ連軍は条約を一方的にやぶって、満州や朝鮮北部などへ攻めてきました。戦争が終わると、軍人たちは、ソ連兵から「ダモイ(帰国)」と言われ、貨物列車などで移動するよう命じられました。しかし、着いたのは日本ではなく、シベリアやモンゴルなどのとても寒い地域でした。そうした人たちは約57万5千人にのぼりました。

「関連する主な出来事」をチェックしてみよう

👉 (P19~20)

昭和20(1945)年8月8日
ソ連が日本に宣戦布告

ソ連軍が満州や
朝鮮北部などに
攻めてくる

昭和20年8月15日 終戦

戦後強制抑留が
始まる

昭和21年
抑留者の帰国が始まる

昭和31年
抑留者を乗せた最後の引揚船、
舞鶴へ入港

強制労働

抑留者は、さまざまな労働を課せられました。労働の内容は、森林伐採、鉄道建設、農作業、鉱山採掘など、地域や収容所により異なりました。それぞれの労働には、毎日ノルマ(割り当てられた仕事)がありました。

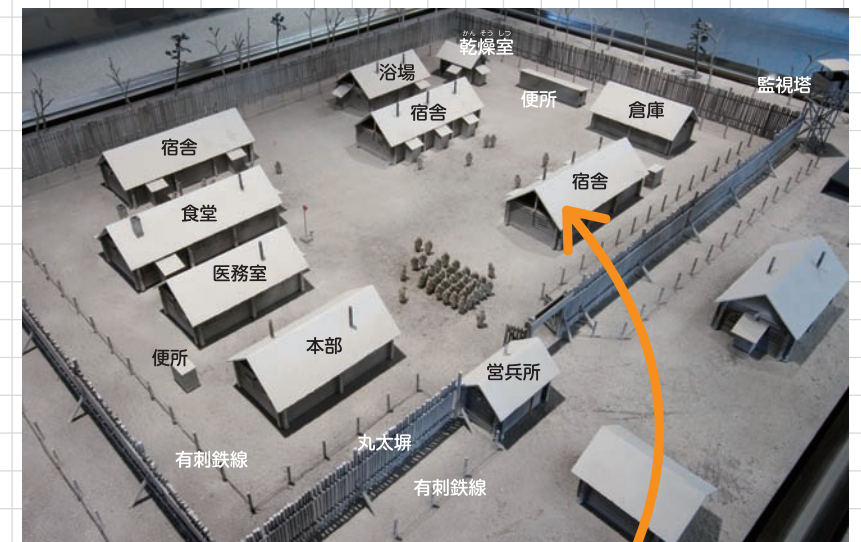


ロシア製の斧とのこぎり

抑留者が森林伐採などに使用していた
ものと同じ形の斧とのこぎりです。

収容所生活

抑留者は、ラーゲリと呼ばれる収容所に入れられました。収容所の外周は丸太塀や有刺鉄線で囲われ、監視塔がありました。銃を持ったソ連兵が見張っていました。敷地内には、宿舎や食堂、便所、医務室、浴場などがありました。



飢えとの闘い

抑留者の一日の食べものは、黒パン約350グラムと、カーシャと呼ばれるお粥やスープが少しだけでした。常にみんなが空腹を空かせていたので、ものさしや天びんまで手作りして黒パンの大きさに差が出ないように、切り分けました。



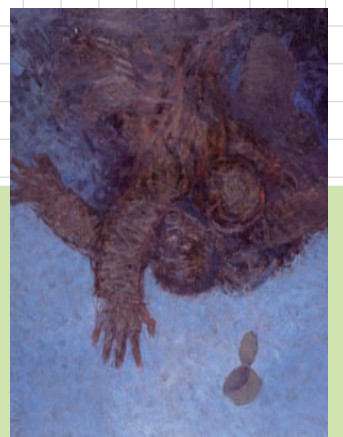
食事の分配

袖なしの防寒外套

シベリアの冬はマイナス30~40度になります。この外套の持ち主は、飢えに耐えかね、現地の労働者が持っていたパンと外套の袖を交換しました。袖がなくなると、腕が凍傷にかかる恐れがありましたが、それでも空腹には勝てませんでした。

「飢えの果て」 関 豊 さん画

抑留生活は、常に空腹の状態でしたので、雑草や木の皮、虫など口に入るものは何でも食べました。この絵は、ソ連の監視兵が食べ終わって捨てた空き缶を2人の抑留者が取っ組みあつてうばいあう姿を描いたものです。



寒さとの闘い

抑留者は、冬の厳しい寒さに苦しめられました。シベリアやモンゴルでは、冬の気温がマイナス30～40度にもなりました。抑留者は、この寒さに対応した衣類を支給されていなかったため、亡くなった戦友の服を脱がせて、やむを得ずそれを着ることもありました。冬は地面が凍って硬くなるため、亡くなった戦友を埋葬する穴を掘ることさえできませんでした。



手作りの靴下

ソ連支給の布で作ったものです。糸は布をほぐしたもので、自分で作った針で縫っています。



作業用の手袋

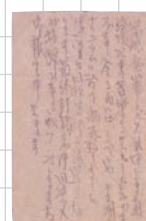
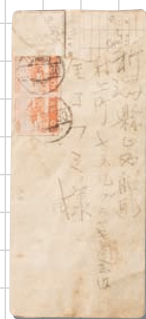
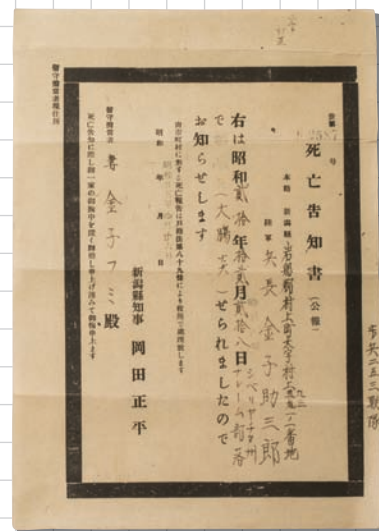
酷寒の中での森林伐採作業で、2人用のノコギリを使ったときに使用したものです。

病気との闘い

抑留中は、汚れた服を着続けなければなりません。さらに、何ヶ月も風呂に入れないなど、とても不衛生な環境におかれました。シラミやダニが原因の伝染病が流行し、多くの抑留者が命を落としました。また、配られたわずかな食べ物では、栄養が足りなくて病気になる人もいました。

死亡を伝える書簡・写真・死亡告知書

収容所で弱り、亡くなったときの様子が書かれた手紙です。同じ収容所に抑留された男性により書かれ、妻のもとに届きました。



抑留者の生きる支えと楽しみ

抑留されてしばらくすると、外部と郵便のやり取りができるようになりました。故郷で帰りを待つ家族からの葉書は、抑留者の生きる支えとなりました。また、収容所生活に慣れてくると、抑留者は空いた時間にさまざまなことをして、日々のつらさを紛らわしました。材料や道具がない中、工夫して将棋の駒などの娯楽品を作りました。



俘虜用郵便葉書

ソ連から抑留者に配られ、赤十字社などを通じて故郷とやり取りをすることができた往復葉書です。ソ連にとって不都合なことが書かれていないか確かめやすいように、初めの頃は全てカタカナで書くように指示されました。



抑留者の手作りスプーン

多くの抑留者が、手に入る材料や道具を使ってスプーンを作りました。飯ごうの底に残ったカーシャ(お粥)をかき出すためのスプーンは、生きていく上でなくてはならないものでした。また、いつの日か故郷へ帰り、好きな食べものを腹一杯食べることを信じてスプーンを作ること、明日への生きる望みをつなぎました。これらのスプーンは、抑留生活を耐え抜いた証として、帰国後も大切にされていたものです。

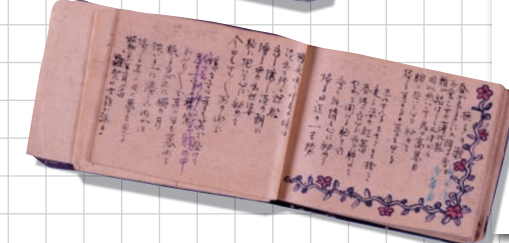
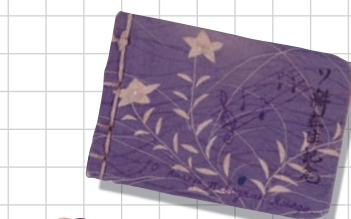
ソ連製の手帳

収容所で、ソ連兵からもらった手帳です。現地の少女や日本の女性などを描きました。



手作りの歌謡曲集

抑留された従軍看護婦が収容所内の診療所で働いていた時に、日本人の兵士からもらった歌謡曲集です。



つらい抑留生活のなかで生きていくために、抑留者はどのような工夫をしたのでしょうか？





海外に渡った日本人

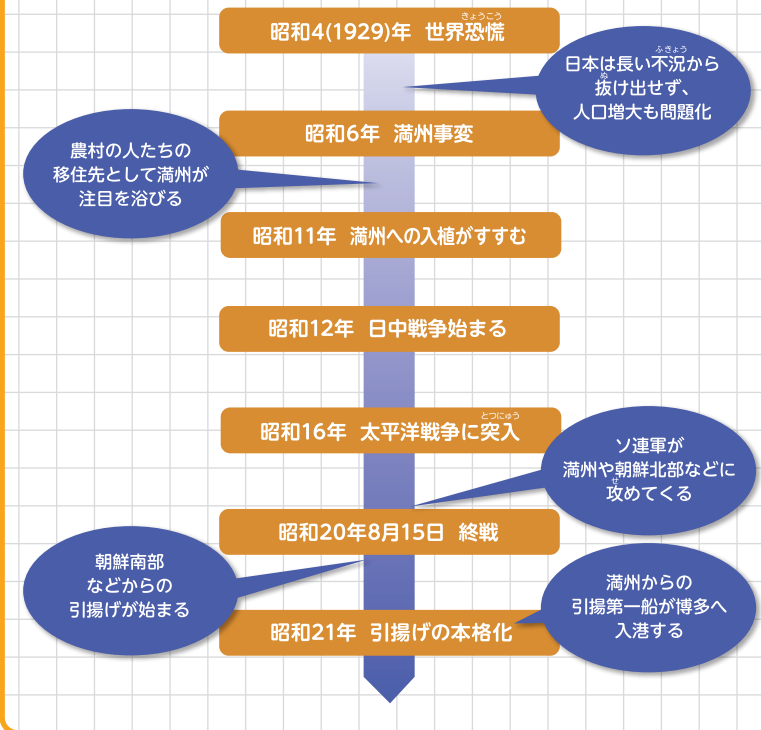
昭和の初めから終戦まで、多くの日本人が、満州・朝鮮・台湾などに新しい土地を求めて移り住み、農業などをしながら暮らしていました。開拓団や青少年を集めた満州開拓青年義勇隊などを含め、昭和20(1945)年当時、満州に暮らしていた日本人は約155万人でした。



満州の学校農園でとれたカボチャと児童

「関連する主な出来事」をチェックしてみよう

P19~20



教科書「課外読本」

満州開拓青年義勇隊の隊員が、満州の訓練所で学んだ教科書です。

ソ連参戦による悲劇

昭和20年8月9日、突然ソ連軍が攻めてきたことで、国境付近の開拓団は大混乱になりました。働き盛りの男性のほとんどが、軍隊に入っていたため、残された女性や子ども、老人だけで、引揚船が出る港まで移動しなければなりません。ソ連兵や、日本に反感を持つ現地住民による暴行、略奪が日常化し、飢えと恐怖、不安におびえながら、敵の目につきやすい道路や集落を避けて、原野をさまようことになりました。都市部にたどり着いた人たちは、学校や病院などを利用した収容所で厳しい生活を送りました。



収容日誌

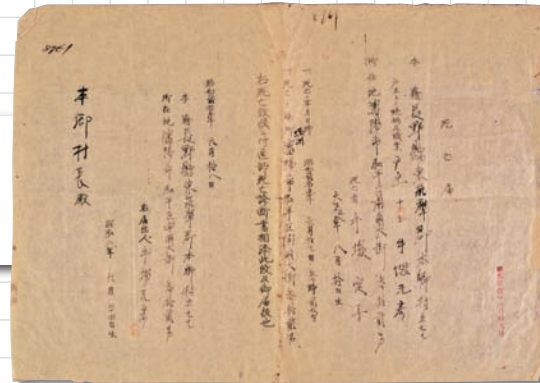
引揚げの途中に滞在したカトリック教会の収容所で書いた、昭和21年2月1日から11月30日までの日誌です。毎日、多くの人が亡くなったことが書かれています。

日本への引揚げ

満州に住んでいた民間人がやっと日本に帰ることができたのは、昭和21年の春のことでした。多くの引揚者は、それまでに築いた生活や財産のすべてを失い、着のみ着のままの姿で帰国しました。海外から引き揚げた民間の日本人は、合計で約320万人にのびりました。

死亡届

昭和21年6月に、旧満州の奉天で急死した母親の死亡届です。当時12歳だった少年が自分で書いて役場に届けました。



「引き揚げ船は大きくてたくましく見えた」 ちばてつや さん画

ぼくたち一家が葫蘆島にたどりついたとき、見上げるほど大きな引揚船がみえた。乗船の順番をまわっていると、子どものいない日本人や、お金もちの中国人から、子どもと食べ物を交換しないかと持ちかけられた。

ちばてつやさんは、6歳の時に満州の奉天で終戦を迎え、1年後に帰国しました。



き かん しゃ ひっ けい
帰還者必携

文部省が発行した小冊子です。「新しい
出発へ」という副題で、海外からの引揚者
や帰国した兵士のために、戦後新たに
成立した法律や制度を解説しています。



手製のリュックサック

引揚げを待つ間、ぼろ布を集めて作ったものです。

「引揚船の船底で」

旧満州の葫蘆島を出港して、福岡県の博多に向かう引揚船の船底を再現したものです。船内では食事が支給されました。ジオラマのモデルとなった白亀丸はくりやうまるで出されたのは、飯と味噌汁とたくあん。収容所では十分な食事をする事ができなかったのも、引揚者にとっては大変なごちそうでした。



船内食器

たいわん
台湾からの引揚船に乗りこむ時に
支給されたアルミ製の食器です。



海外から引き揚げたことを証明する書類です。各地の引揚港に置かれた地方引揚援護局で発行されました。引揚者はこの証明書により、故郷までの鉄道の無料乗車券や、生活に必要な物の配給を受けることができました。



おむつで作った子ども用ワンピース

このワンピースの持ち主は、家族4人で満州に住んでいました。父親は軍隊に入って行方不明となり、ソ連軍が攻めてくると、母親は小さな娘と赤ん坊あかごを連れて引揚港を目指して逃げました。親子は朝鮮北部の収容所で1年を過ごしましたが、乳もでず、ミルクも手に入らず、赤ん坊は亡くなってしまいました。いよいよ帰国が決まると、母親は、娘にはきれいな服を着せてあげたいと思い、亡くなった赤ん坊のおむつでこのワンピースを作ったのです。

「釜^フ山^{サン}の引揚^{ひょう}港^{こう}埠頭^{とう}に立ち尽^つくす孤児^{こじ}」

み やけ かず よし さつ えい
三宅 一美 さん 撮影

この少年は、日本人で、両親は行方が分からなくなっていました。日本人であることが証明できないと引揚船に乗れないため、証明してくれる人を探していたのです。この少年が、日本に帰れたのかどうかは、分かっていません。

三宅さんは、釜山で日本人の引揚げの手伝いをしながら、当時の様子の写真^とを撮りました。



引揚船の中で食事をしている人の中に男の人がいないのはなぜでしょう？



やっと船に乗ることができた引揚者はどんな気持ちだったのでしょうか？

関連する主な出来事

軍部の台頭 中国大陸への進出	
1926	昭和元年 12月25日 大正から昭和へと改元する
1928	昭和3年 2月 日本初の男子普通選挙が行われる 6月 満州某重大事件（関東軍*が、満州の張作霖を爆殺する） ※大正8(1919)年～昭和20(1945)年まで満州にいた日本陸軍の部隊
1930	昭和5年 昭和恐慌（前年の世界恐慌が波及して、深刻な不況となる）
1931	昭和6年 9月18日 柳条湖事件（満州事変の始まり。関東軍が、満州各地を占領する）
1932	昭和7年 2月 リットン調査団の来日（国際連盟が、満州事変の調査を始める） 3月 「満州国」の建国宣言 5月15日 五・一五事件（海軍青年将校らによって、犬養毅首相が殺害される。政党内閣が終わる） 9月 日満議定書の調印（日本が、「満州国」を承認する） 10月 リットン調査団が、日本・中国にリットン報告書を提出する 満州へ第一次移民団が出発する（満蒙開拓団の草分けとなる）
1933	昭和8年 2月 国際連盟が、リットン報告書に基づいて、「満州国」の不承認を採択する 3月 日本が、国際連盟の脱退を通告する（10月にドイツも国連の脱退を通告する）
1936	昭和11年 2月26日 ニ・二六事件（陸軍青年将校らによって、斎藤実内大臣や高橋是清大蔵大臣などが殺害される） 8月 広田弘毅内閣が、20年間で100万戸（500万人）の満州移民の入植を決定する
日中戦争の泥沼化 第二次世界大戦の勃発	
1937	昭和12年 7月 7日 盧溝橋事件（日中戦争の始まり） この年 全国各地で、兵士におくる千人針や慰問袋が盛んになる
1938	昭和13年 1月 「国民政府を対手とせず」の第一次近衛声明（日本が、中国に和平交渉の打ち切りを通告する） 4月 国家総動員法の公布（政府が、議会の承認なしに、戦争に物資や労働力を総動員できるようにする）
1939	昭和14年 5月 ノモンハン事件（日本軍とソ連軍が、満州とモンゴル国境のノモンハン付近で戦闘する。9月に停戦） 9月 1日にドイツ軍が、ポーランドに侵攻する。これに対して、3日にイギリス・フランスが、ドイツに宣戦を布告する（第二次世界大戦の始まり）
1940	昭和15年 9月 日本・ドイツ・イタリアが、日独伊三国軍事同盟を結ぶ 10月 全政党が解散して、大政翼賛会が発足する（国民を政治的に統制する役割を果たす）
アジア・太平洋における戦争 戦線の拡大	
1941	昭和16年 4月 日本とソ連*が、相互の領土を不可侵とする日ソ中立条約を結ぶ ※ソビエト社会主義共和国連邦。1922年～1991年まで存在した、ロシア共和国をはじめとする15の国からなる初の社会主義国家 1991年の崩壊後はロシア連邦が主な権利を引きついだ 6月 ドイツ軍が、ソ連に侵攻する（独ソ戦の始まり） 7月～8月 7月28日に日本軍が、南部仏印*進駐を始める。これに対して、8月1日にアメリカが、日本への石油輸出を禁止する ※現在のベトナム南部 12月 8日 日本軍が、マレー半島のイギリス軍、ハワイ真珠湾のアメリカ軍を攻撃する（太平洋戦争の始まり） 12月11日 ドイツ・イタリアが、アメリカに宣戦を布告する
1942	昭和17年 1月～5月 日本軍が、アジア・太平洋地域のシンガポール・インドネシア・ビルマ・フィリピンなどを占領する

戦局の悪化 そして終戦	
1942	昭和17年 6月 ミッドウェー海戦（戦局の転機） 8月 アメリカ軍が、ガダルカナル島に上陸する
1943	昭和18年 2月 日本軍が、ガダルカナル島から撤退する。ミッドウェー海戦とあわせて、日本軍は、制海権と制空権を失い、補給線を断たれる 9月 イタリアが、連合国に無条件降伏する 10月 学徒出陣（兵力不足を補うため、20歳以上の文科系男子学生は、徴兵延期を取り消されて出征する） 12月 アメリカ・イギリス・中国の首脳が、カイロ宣言を発表する（台湾・満州を中国に返して、朝鮮を独立させるとともに、日本の無条件降伏まで戦うことを決定する）
1944	昭和19年 7月 サイパン島が陥落して、東条英機内閣が総辞職する 11月 サイパン島が基地となり、アメリカ軍のB29*による日本本土への空襲が本格化する ※アメリカ軍が開発した爆弾搭載量9トンの重爆撃機
1945	昭和20年 2月 アメリカ・イギリス・ソ連の首脳が、ヤルタ会談を開く（ソ連が、南樺太・千島列島の領有や満州の権益を見返りとして、ドイツの降伏後に、対日参戦する秘密協定を結ぶ） 3月10日 東京大空襲（アメリカ軍のB29が、下町一帯を無差別爆撃して、東京の約4割が焼ける） 3月26日 アメリカ軍が、3月26日に慶良間諸島へ、4月1日に沖縄本島へ上陸する 4月 ソ連が、日ソ中立条約を延長しないことを日本に通告する。条約は、翌年4月まで有効 5月 ドイツが、連合国に無条件降伏する 6月23日 沖縄で、アメリカ軍に対する、日本軍の組織的な戦闘が終わる 7月26日 アメリカ・イギリス・中国の首脳が、占領方針と日本降伏を勧告するポツダム宣言を発表する 8月 6日 アメリカ軍のB29が、広島に原子爆弾を投下する 8月 8日 ソ連が、日本に宣戦布告する（ソ連軍は、9日に満州・朝鮮北部へ、11日に南樺太へ侵攻する） 8月 9日 アメリカ軍のB29が、長崎に原子爆弾を投下する 8月14日 日本政府が、ポツダム宣言の受諾を最終決定する 8月15日 玉音放送（昭和天皇により、戦争の終結が国民に発表される） 8月23日 ソ連のスターリンが、「日本軍俘虏50万人」を労働力として利用するよう決定し、24日に命令する
連合国による日本占領 復員・抑留・引揚げの始まり	
1945	昭和20年 9月 2日 日本政府が、ポツダム宣言に基づき降伏文書に調印する（第二次世界大戦の終わり。アメリカを中心とする連合国の日本占領の始まり） 朝鮮南部からの引揚第一船「興安丸」が、釜山より仙崎へ入港する 9月25日 復員第一船「高砂丸」が、中部太平洋のメレヨン島より別府へ入港する 10月 国際連合の発足 11月 厚生省引揚援護課及び地方引揚援護局*の新設 ※浦賀・舞鶴・呉・下関・博多・佐世保・鹿児島に新設された。この他、函館・名古屋・田辺・宇品・大竹・仙崎などでも引揚者を受け入れた 11月～12月 陸軍省と海軍省の廃止。第一復員省と第二復員省が設置される
1946	昭和21年 3月 海外にいる日本人の引揚げは、GHQ*の「引揚に関する基本指令」に基づいて、日本政府が行うことになる ※連合国軍最高司令官総司令部。アメリカのマッカーサーが、連合国軍最高司令官を務める 4月 旧満州からの引揚第一船が、博多へ入港する。10月までに、旧満州にいた民間人の約100万人が帰国する 5月～6月 日本政府の要請により、アメリカが、抑留者の送還についてソ連と交渉を始める 12月 ソ連本土からの引揚第一船「大久丸」と「恵山丸」が、ナホトカより舞鶴へ入港する 「ソ連地区引揚に関する米ソ協定」の調印により、抑留者の帰国が本格化する 朝鮮北部からの引揚第一船「永録丸」が、興南より佐世保へ入港する
1947	昭和22年 5月 3日 日本国憲法の施行
1948	昭和23年 5月 厚生省引揚援護庁の新設 8月 大韓民国の成立 9月 朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の成立
1949	昭和24年 10月 中華人民共和国の成立。中国からの集団引揚げが中断される
1950	昭和25年 6月 朝鮮戦争の始まり
1952	昭和27年 4月28日 サンフランシスコ講和条約の発効により、連合国の日本占領が終わり、日本は主権を回復する
1953	昭和28年 3月 北京協定に基づいて、中国からの集団引揚げが再開される 7月 朝鮮戦争の休戦協定が結ばれる
1956	昭和31年 10月 日ソ共同宣言の調印（日本とソ連が、国交を回復する） 12月 ソ連本土からの引揚最終船「興安丸」が、ナホトカより舞鶴へ入港する
1958	昭和33年 11月 最後の地方引揚援護局（舞鶴）が閉局される

第二次世界大戦時のアジア・太平洋地域

